

平成二十八年 度

第二十六回 島根県雲南市

「永井隆平賞」入賞作品集

島根県雲南市教育委員会

もくじ

小学生低学年の部

最優秀賞 ぼくの「によこあい人」

優秀賞 家族がいるからぼくがいる〜ぼくのおつとめ〜

佳作 人のことをたいせつにできる人に

バスケットつていいね

島根県・雲南市立掛合小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

島根県・雲南市立西小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

和泉樹音
いずみじゅのん

山田嵩真
やまだしゅうま

石田慶太
いしだけいた

高原健人
たかはらけん

小学生高学年の部

最優秀賞 曾祖母から学んだ生き方

優秀賞 相手を思いやる心

佳作 命の恩人は私の身近に

当たり前じゃない大切な平和

伝えよう!!太鼓の響きに乘せて

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立佐世小学校

島根県・雲南市立大東小学校

島根県・雲南市立加茂小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

龍谷みなみ
りゅうたに

永瀬天磨
ながせてんま

陶山晴香
たうやまはるか

山根麗奈
やまねれな

景山桜
かげやまざくら



中学生の部

最優秀賞 私の核廃絶〜曾祖父といっしょに〜

優秀賞 高祖母と曾祖母から受け継いだ戦争への想い

佳作 「さよなら」の意味は

〃 未来へ語り継ぐために

広島県・盈進中学校

島根県・雲南市立掛合中学校

島根県・出雲市立斐川東中学校

沖縄県・八重瀬町立東風平中学校

前

加藤

藤

元

福原

未

来

大

アイコ

すずな

高校生の部

最優秀賞 二つの思い、願いは一つ

佳作 博士と祖父の志〜許し愛〜

〃 斑な世界へ

〃 先人たちの思い

広島県・盈進高等学校

秋田県・秋田県立横手高等学校

愛知県・滝高等学校

沖縄県・KBC学園未来高等学校

作原

後藤

伊藤

伊藤

愛理

ゆうひ

正子

江理

一般の部

最優秀賞 遺影

優秀賞 母から聞いた満州引き揚げのこと

佳作 先生 あしたもくるけえ

島根県

広島県

島根県

錦織

末国

渡部

博子

正志

千秋

特別賞

永井隆特別賞 「生と死は紙一重」

島根県

長澤

諄

◆ 小学生低学年の部 ◆

最 優 秀 賞

ぼくの「によこあい人」

島根県雲南市立

掛合小学校 三年

和 い
泉 ずみ
樹 じゅ
音 のん

ぼくは、なぜせんそうをしたのか分かりません。せんそうの声を聞こうとすると、たくさんの人のかないし声が聞こえてきます。こわがっている子どもの声、苦しいのをがまんする声、「せんそうなんてやめたい。」という声、ばくだんをのせたひこうきが近づいてくる音、いろいろな声がぼくの心に聞こえてきます。人はなかよくするのがいいのに、なぜせんそうをはじめたのでしょうか。ぼくは、永井はかせの「によこあい人」という言葉がとても心にのこりました。によこあい人とは、自分よりもまわりの人を大切にすることです。はかせは、げんばくで頭を大けがしました。でも、はかせはいたみ

をこらえて、血だらけになっても、みんなを助けました。はかせのように、血だらけになっても人を助ける人は、少ししかいないと思います。ぼくもはかせのような人になりたいと思いました。

でも、ぼくは、「によこあい人」ができていない時があります。

水泳の時、友だちとちよつと足があたっただけでけんかになってしまいました。ぼくはいらいした時、友だちをけつてしまいます。けつたらいけないと分かっているけど、けられたらけりかえしたくなります。いらいらがいつぱいたまった時、ぼくからけんかを始めることもあります。でも、さい近気がつきました。友だちをけつても、気持ちはずきりしません。いらいらがもっと大きくなるだけです。

ドッチボールをする時にも、けんかになります。けんかになるときは、だれかがルールをやぶった時です。ボールが当たったのに外野に出ない友だちがいて、ぼくはおこりました。その後自分も当たったけど、いらいらしていたから外野に出ませんでした。

ぼくはいらいらしてばかりです。でも本当は、もっ

と友だちとなかよくしたいです。

ぼくはけんかの後、一人になりたい気持ちになり、一人で読書を始めました。初めは本を読みながら、友だちのせいばかり考えていました。でもしばらくすると、「ぼくがけたところ、いたかったかな。けらなければよかったな。」という気持ちが出てきました。けんから少したったけど

「ごめんね。」

と言ったら、ともだちが

「いいよ。ぼくこそごめんね。」

と言ってくれ、心がスツキリしました。

なぜ、せんそうが始まったのか。それは、日本も外国もによこあい人を知らなかったからだと思います。いらした気持ち元になって、国と国のけんかになったのかもしれない。せかい中の人みんながによこあい人を知ったら、せんそうがなくなると思います。

ぼくにとってのによこあい人は、「いらいらをこらえること」と「悪かったと思ったらあやまること」です。ぼくは友だちが大切です。友だちがいるからいろんな遊びが楽しいです。友だちにやさしくし、はかせのような

強くてやさしい人になりたいです。



◆ 小学生低学年の部 ◆

優 秀 賞

家族がいるからぼくがいる
～ぼくのおつとめ～

島根県雲南市立
鍋山小学校 三年

須^す山^{やま}嵩^{しゅう}真^ま

四月十一日、朝六時三十分。ぼくは元気にお母さんのお腹から生まれました。赤ちゃんだから記おくにはないけれど、元気に生まれてきてほしいとみんなが思っていることはよく分かっていたと思います。ぼくが生まれた時、お母さんは大へんだったらしいです。ぼくが元気なのは、お母さんががんばって生んでくれたからで、それがとつともうれしいです。ついた名前は「嵩真」。「高い目ひょうを持って真っすぐつき進む」という意味だそうです。この名前はすごく気に入っています。

ぼくのひいじいちゃんは、ぼくが生まれてくるのを待っていてくれたけれど、ぼくが生まれる四ヶ月前にな

くなくなってしまいました。ひいじいちゃんがなくなった日時とぼくが生まれた日時が同じだから、家族は、ぼくがひいじいちゃんの生まれかわりだと言っています。ぼくはよくひいじいちゃんにしていることをするらしく、そのたびに家族がびっくりしています。そんな時はぼくの中にひいじいちゃんがいるんだと思って、とても会ってみたくります。

そして、ぼくにはひいばあちゃんもいました。世界で一人の大好きなひいばあちゃんでしたが、去年急になくなつてとても悲しかったです。ぼくはこの時初めて、世の中で一番悲しいのは家族がなくなってしまうことだと分かりました。

ぼくは、一年生の時から毎日ねる前に、おじいちゃんとおつとめ」をしています。今までは「何でこんなことをするんだ」と思っていました。ひいばあちゃんになくなつてから、なぜ「おつとめ」をしているか分かった気がします。それは、なくなった人の今まで育てくれた感じとか、明日も平和で変わらない一日でいてほしいとかの気持ちを伝えるためだと思っています。

ぼくの家は八人家族ですが、みんなとても仲がよくて

毎日が楽しいです。家族はぼくが一生けんめいやっている野球や和太こや英語などをおうえんして協力してくれるので、ぼくは本当に幸せだなあと 생각합니다。でも、さいきん、さいがいやテロや人の命をかんとにうばってしまう出来事がたくさんあって、それを聞くと悲しい気持ちになります。ぼくとひいばあちゃんのおわかれのように、たくさんの方が急になくなって悲しい思いをしている家族やぼくと同じようにおつとめをしている人が世界中でたくさんいると思います。

だから、ぼくはおつとめのしめに生活信条を読みながら思います。「ぼくはぼくの中に生きているひいじいちゃんと、たくさんの方のことを教えてくれたひいばあちゃんのことを忘れず強く明るく生きぬきます。ぼくが一生けんめい生きるためにつねにわが身をかえりみてぼくを支えているあらゆるものに感じやします。正しい道を聞き分けて友だちや家族やぼくの周りにいる人とたがいにうやまい助け合い社会のためにつくします。」家族がいるからぼくがいる！今の命を大切にがんばるよ！



◆ 小学生低学年の部 ◆

佳 作

人のことをたいせつにできる人に

島根県雲南市立

西小学校 二年

石^{いし} 田^だ 慶^{けい} 太^た

ながいはかせのように、じぶんより人のことをたいせつにできる人は、すごいと思います。ぼくは、ながいはかせみたいな人になりたいです。でも、それはちょっとむずかしいなと思います。

先生が、ながいはかせの本を読んでくれたあとに、ぼくがかんそうを言うと、

「どうやったら、じぶんより人のことをたいせつにすることになると思いますか。」

と先生に聞かれました。何てこたえたらいいかわからなかったけど、この前のみんなあそびのときのけんかを思い出しました。

ぼくは、話し合いがかりです。ぼくのクラスでは、火よう日と木よう日にクラスみんなであそぶので、何をしておそぶかをきめるときに話し合いをするかかりです。その日は、けいどろにきまりました。けいさつとどろぼうをきめて、スタートしました。

けいどろをしていると、

「ゴールのまえからしかたすけちゃいけんよ。」

「うしろはだめだけよこからはありだよ。」

と大きなこえが聞こえました。けいさつの人とどろぼうの人がけんかをしていました。ぼくは、けんかはいやだなと思ったけど、とめずにそのままけいどろをしました。でも、やっぱり楽しくあそびたいから、先生にけんかのことを話しました。

そして、五時間目のはじめに、みんなでけいどろのルールについて話し合いをすることになりました。ぼくたちがまえで、けんかにならないようにするにはどうしたらいいか聞くと、けいさつの人もどろぼうの人もみんな思っていることを話してくれました。たくさん話しあつて、けいさつの人もどろぼうの人もいいと思うルールを

きめました。

木よう日、またけいどろをしました。みんなきめたルールをまもってくれたので、けんかもなくて楽しくあそぶことができました。

はじめは、けいさつの人もどろぼうの人もじぶんたちがいいようにルールをきめてあそんでいたからけんかが多かったけど、いまは、みんなのことをみんなで考えてきめたルールだから、なかよく楽しくあそべていると思います。

「どうやったら、じぶんより人のことをたいせつにすることになると思いますか。」

という先生のしつものこたえは、

「じぶんのことがいちばんじゃなくて、みんなはどうかんって考えてからやることです。であっていますよね。」って、ながいはかせに聞きたいです。

それと、「ぼくはそれができる人になります。」ってつたえたいです。



◆ 小学生低学年の部 ◆

佳 作

バスケットっていいね

島根県雲南市立

三刀屋小学校 二年

高^{たか}原^{はら}健^{けん}人^と

ぼくは、四月二日にじょうぶに生まれました。ぼくがけんこうであるよう、「けん人」と名前がつきました。今まで大きなびよう気になったことはないし、かかって一日でなおるくらい元気です。

ぼくは、小さいときからバスケットをやっています。小さいころから元気だったぼくは、お父さんがバスケットをしているのを見て、やってみたいなあと思いました。バスケットのおもしろいところは、ドリブルをして、友だちにパスをして、シュートが入ることです。シュートが入ったとき、「やったあ。」って思うし、友だちとタッチをして、「がんばったね。」

とこえをかけるから、まいかいれんしゅうの日が楽しみです。

ある日、むかえに来ていたお母さんが、

「けんちゃん、バスケットができて、しあわせだね。」

と言いました。小さいころに言われたので、ぼくは、そのことばのいみがわかりませんでした。

でも、小学校でながいたかしはかせのべんきょうをして、へいわについて学びました。せんそうや、げんぱくのことをして、むかしは、バスケットもやきゅうも、何でもスポーツはのびのびとできなかったんだとわかりました。

だからぼくは、小学校でもバスケット教しつでも、今のびのびとバスケットがじゆうにできてしあわせです。お母さんが言っていた、「しあわせ」のいみは、こういうことだったんだと思いました。

もう一つ、バスケットでしあわせなことは、たくさんの友だちができることです。いっしょにはいたり、ボールをつかってドリブルきょうそうをしたり、しあいをしたりして、楽しいことがいっぱいです。

まだほかのチームとしあいをしたことはないけど、お

兄ちゃんのチームのしあいを見たときに、ベンチのなかまがシュートのあと、大きな声を出してはく手をするのを見て、なかまっていいなあと思いました。

こんなふうには、バスケットをやっていると、友だちとなかよくなれるし、ほかのチームの人ともなかよくなれるかもしれません。スポーツで、人となかよくなることも、へいわなのかな、と思います。

今年は、リオでオリンピックがあつて、せかい中からせん手がやってきて、スポーツでたたかいます。どんなにたたかっても、しあいがおわれれば、あく手をしたり、だきあつたりして、なかよくなれるのかなと思います。スポーツをして、せかい中の人となかよくなれば、せかいがへいわになると思います。

ぼくは、これからバスケットをやりたいです。チームの友だちや、しあいのあい手となかよくなりたいです。これが、今のぼくにできる、へいわの一歩かなあと思います。



◆ 小学生高学年の部 ◆

最優秀賞

曾祖母から学んだ生き方

島根県雲南市立

三刀屋小学校 六年

龍谷

南

私には、曾祖母が一人います。その曾祖母には、片腕がありません。私と妹が会いに行くときとても喜んでくれます。片方の腕でぎゅっと抱きしめてくれたり、おかしやあめをくれたりして、とてもうれしいです。私は、曾祖母の腕が片方ない理由は知らなくてもいいと思っています。なぜなら、曾祖母は腕がなくても、いつも前向きだからです。あるとき母が、仕事中の事故でのことだったと教えてくれました。

きっと、その時は、悲しくつらかったと思います。曾祖母は右利きなのに右腕がなくなったので、日常生活がたいへんだったことでしょう。曾祖母は、みんなと同じ

ことをして、みんなと同じように生活をしています。曾祖母は、毎日笑顔で、少しも暗い顔をしていません。手際よくお皿を出したり、お茶やお菓子を出したりしてくれます。

「ひいおばあちゃん、たいへんだったね。」

と言ったら、

「家のことから子や孫の世話、畑仕事と毎日やることがいっぱいあって、それが生きがいだったよ。」

と話してくれました。

その時私は、五年生の時に福祉の学習をしたことを思い出しました。障がいのある方々が、石けんの箱を組み立てる仕事や、野菜を育てて出荷する仕事や、クリーニングの仕事をしておられるのを見学しました。みなさんが、一生懸命がんばって仕事をしておられることが、曾祖母と似ているなと思いました。

私の父母も福祉の仕事をしています。高齢者の方の介護の仕事です。私は時々、父母の仕事場に行きます。高齢者の方は、みんな笑顔で

「よく来たね。」

「いい子だね。」

と言ってくださるので、とてもうれしいです。私は、父母の職場に行ったら、車いすを使い、部屋からリビングに高齢者の方を押していくことがあります。そうすると笑顔で

「ありがとうございます。」

と言ってくださいます。手の力が弱くて自分でご飯を食べることができない方に食べさせてあげたら、

「んーっ。」

とうれしそうな表情で喜んでくださったって、私もうれしい気持ちになります。また次もお手伝いして喜んでもらいたくなります。

曾祖母とは、家が離れているので、毎日会うことはできないけど、時々曾祖母の家に行きたいと思うときがあります。それは、会いに行くと、とても優しい気持ちに包まれるような感じになります。これからも、曾祖母の家にこまめに行って、たくさん話してたくさん笑えたらいいなと思います。私は曾祖母の腕は、魔法の腕だと思います。曾祖母も私たちも笑顔がたくさん出るからです。とても優しい曾祖母が私は大好きです。曾祖母には、これからも元気で長生きしてほしいです。

つらさや苦勞を優しさと明るさに変えて、前向きに生きる曾祖母のように、私も強くなり、人に優しく、人の役に立つことをしていきたいです。そうすれば、私も笑顔でいっぱいになり、みんなの笑顔もいっぱい増えると思います。



◆ 小学生高学年の部 ◆

優 秀 賞

相手を思いやる心

島根県雲南市立
佐世小学校 六年

永瀬天磨
なが せ てん ま

「温かい手だった。僕の調査を誰も評価してくれなかったけれど、話を聞いてもらって努力が報われた気がした。」

オバマさんが広島に来て思いを伝えたニュースの中で一番心に残った記事だ。オバマ大統領が抱き寄せる森重昭さんのすがただった。森重昭さんは、自分が被爆していたのに、被爆米兵の調査をした人だった。

森重昭さんは、八才の時に、爆心地から、二・五キロ地点で被爆した。

「かつては、敵国だったが同じ被爆者」と、言っている森重昭さんのことを、敵国の人なのに同

じ被爆者と言えるのか不思議に思った。ぼくが森重昭さんだったらと考えた時、去年の手術のことを思い出した。五年生の時、頭の病気のため、手術をしなければならなくなつた。約一ヶ月間、野球を休まなければならない時期があつた。

手術前日、友達のお母さんから画像が送られてきた。そこには、「てんちゃんマクト杯勝つけん待つ」といて。」と書いてあつた。その言葉を読み安心して手術ができた。

手術は、無事成功した。徐々に回復したある日、野球部のメンバーがお見まいに来てくれた。本当は、みんな野球や勉強でいそがしいと思うけど、来てくれたのでとてもうれしかった。それに、みんなが一言ずつメッセージを言ってくれたDVDをもらった。とてもうれしかったし、とてもぼくの力になった。何度も吐いたし、野球ができなくてつらかったけど、大きなはげみになった。

「次の大会は必ず勝つけん待つ」といてね。」と、言ってくれたので

「ぼくの方までたのんだよ。」

と、伝えた。そう言っただけ、本当は、ぼくも、早く野球がやりたいと思っていた。試合に出れなくて、練習が

できなくて、くやしきでいっぱいだった。

もし、このころのぼくのような人が相手チームにいたら、その人に、どんな言葉をかけるだろうか。「ざまあみろお。」などと、思うだろうか。いや、ぼくは、その苦しみを分かっているから、その人を助け、優しく、安心するような言葉をかけるだろう。そう考えると、森重昭さんは、被爆者の苦しみが分かるから米兵調査をしたのだろう。この調査から十二人の米兵ほりよが被爆して、死亡しているのが分かっているそうだ。

ぼくたちのくらしは、あたりまえのくらしなんかじゃない。じっさいに、戦争中の日本では、ご飯を食べられるということは、とてもうれしいことだった。だから、ぼくたちのふつうの生活は、昔の人にとっては、ふつうの生活ではないのだ。ぼくたちが、ふつうに生活していることに感謝して、生きたいと思う。そのためには、敵も味方もなく、国と国がおたがい助け合っていくことが必要だと思う。森重昭さんのように、相手を思いやる心を持ち続けて、野球や勉強に取り組んでいきたいと思った。



◆ 小学生高学年の部 ◆

佳 作

命の恩人は私の身近に

島根県雲南市立

大東小学校 六年

陶 す
山 やま
晴 はる
香 か

「己のごとく人を愛せよ」この意味から、「如己堂」は名付けられた。永井隆はまさに愛にあふれた人だと私は思う。世のため人のため、最後まで人々の事を思い、愛した永井博士はたくさんの人々の「命の恩人」だと私は思う。博士が亡くなるまでの六年間、如己堂で書いた本は、十七冊にもなる。その本はたくさんの人に読まれ、心を動かした。たくさんのお金も入ったが、博士は自分のためにはほとんど使わず、長崎でつらい思いをされ、苦しんでいる人々に寄付をした。私はそんな心優しい博士にとっても感動した。私は博士の学習をして、博士と同じような「命の恩人」

が私にもいることに気が付いた。それは、私の病気を治してくださった病院の先生だ。私は、今までたくさん入退院をくり返してきた。たくさん治療をし、とても苦しい時もあった。しかし、先生は私の病気を治すために、一生けん命にがんばってくださいました。私はそんな先生と博士には共通点があると思う。それは、病気になって苦しんでいる人を一生けん命に助けようとする気持ちがあるということだ。「たくさんの人々の命を救いたい。」「たくさんの人々に笑顔になつてほしい。」という気持ちがこの二人にはある。その気持ちのおかげで私の命は救われた。そして、もう一人。私は一年生の頃に「骨髄移植」を経験した。正直一年生だったので、この「骨髄移植」がどれだけすごいことなのかあまりよく分からなかった。しかし、私も六年生になり、その出来事の大きさに気が付いた。「骨髄移植」で私に血液を分け与えてくれたのは父だった。私によくちよっかいをかけ、学校でどんなことがあったのか、いちいち聞いてくる父。答えるのがめんどくさくて、父に対してあまりよい感情を持っていなかった。また、思春期の私は反抗するようになっていた。私の事を心配してくれているのは分かるが、なかなか素

直になれない。しかし、この作文を書くことをきっかけに、父について考え、父に対する気持ちが変わった。父は「大切な我が子を助けたい。」という一心で、博士のように私を命がけで救ってくれた。まさに、私の「命の恩人」である。私の命を救ってくれた父に対して、感謝の気持ちを持たなければならぬという気持ちがあふれてきた。

私達の身近には、博士のように「如己愛人」の心を持つ人がある。しかし、私のように身近な人の愛を意識せず、感謝の気持ちを持っていない人が多いと思う。「どうでもいい。」としたり「めんどくさい。」と感じたりすることが多いかもしれない。しかし、身近な人の愛は決して当たり前ではない。自分を支えてくれる人へ感謝の気持ちを持つことが大切であり、その心こそが平和へとつながると思う。私は救ってもらった命を大切に、感謝の気持ちをもちながら生きていきたい。そして、いつか、たくさんの人を助けられる「命の恩人」そんな人に私もなりたい。



◆ 小学生高学年の部 ◆

佳 作

当たり前じゃない大切な平和

島根県雲南市立

加茂小学校

六年

山^{やま}根^ね麗^れ奈^な

私は小さいころ、不安でいっぱいな時期がありました。その時の私は、この世界の何もかもが大きくて、怖くて、自分がどこかに消えていってしまいそうなくらいの不安を抱いていました。

毎日毎日、私は不安でいっぱいでした。

でもそんなとき、家族が助けてくれました。不安になっていた私を、支えてくれたのです。家族がいてくれたおかげで、私は毎日を楽しく生きていられるのです。でも、もし不安を抱いていた時期に家族がいなかったら…？もし、不安が消えず、毎日が楽しく生きられていなかったら…？ふと、そんなことを考えました。小さい

ころだったら、「家族がすぐそばにいるのは当たり前。」と思っていたかもしれません。でも、今はちがいます。戦争の恐ろしさを知ったからです。

戦争は、私が思っていたよりもとても恐ろしく、悲しいものでした。

生きてくても生きられなかった人達。家族と一緒にいたいのにいられなかった人達…。

もし私が家族と一緒にいられなかったとしたら、私は、毎日楽しく生きていられなかったかもしれません。改めて家族の大切さを知りました。戦争は、人の憎しみから起こり、人の心を深く傷付けてしまいます。戦争から得られたものよりもなくなってしまうもののほうが、はるかに大きいのではないのでしょうか。

ある日、私は家族とケンカをしてしまったのです…。次の日、モヤモヤした心で学校へ行き、平和学習をしました。戦争のことについて調べていると、広島と長崎に投下された原子爆弾により亡くなってしまった人が、約二十一人もいるという資料を見つけました。

私はこの資料を見て、今、この日を精いっぱい生きることが大切だと感じました。その日にできることは後回

しにせず、できることを頑張って取り組むことによって、充実した毎日を過ごすことができるのです。

でも、精いっぱい生きるとは難しいと言われます。今の日本は平和であり、いつ起きるのかわからない戦争ありません。だから、「明日が来るのは当たり前。」と誤ってしまいがちなのです。当たり前ではないことを、当たり前だと思ってしまうのです。だから、「明日やればいい。」とか、「今日はいいや。」などと思ってしまうのだと思います。

実際に私も、家族に「明日謝ればいいか。」と思っていました。でも、明日が来るのは当たり前ではないと気が付いた私は、帰ったらすぐ謝ろうと思いました。

私は、私達が当たり前だと思っていたことが、「平和」なのだとわかりました。家族、友達、喜びや幸せ…。「平和」は、いつも周りにあるけれど、本当はとても大切なものだということに気がつきました。この平和を守るために、一人一人が毎日を精いっぱい生き、当たり前ではない平和の大切さを心に入れていきたいです。



◆ 小学生高学年の部 ◆

佳 作

伝えよう!! 太鼓の響きに乘せて

島根県雲南市立

三刀屋小学校 六年

景 かげ やま 山

桜 さくら

「平和を!!」

リーダーの掛け声が夜の体育館に響きます。デコデコデコ……デン。これは、私が通っている三刀屋太鼓チームの『平和を』という曲の最初の部分です。大きな響きと小さな響きが呼応し、戦いの足音が近づいてきます。やがて、激しい響きとなり、戦いが始まります。そして、ドラの音。焼け野原から、人々が立ち上がり、平和が訪れます。最後は、全部の太鼓の音で盛り上がり、一体感がうまれます。

この曲を作ったのは、私の祖父です。音がずれると、「ちゃんと聞け。」

と一喝されます。ばちをまわす右手に氣をとられていると

「左手の音が小さい。」

と祖父の声が飛びます。八十五歳の祖父は三刀屋太鼓の指導者でもあります。私は週に一度の練習をみんなががんばっています。みんなと音を合わせるのは、とても楽しいです。

この『平和を』という曲は、永井隆博士が平和を祈り続け書かれた「平和を」をもとに、戦争と平和を曲にしたものです。祖父は三刀屋の誇りである博士を見つめ、博士の願われた平和がいつまでも続くように、戦争が二度と起きないようにと願ってつくったのだと思います。それは、少年時代を戦争の中で育った祖父の願いでもあると思います。祖父は三刀屋の博士を尊敬し誇りに思い、三刀屋が好きで大切に思っているのだと思います。

その土地、その土地の曲をつくった祖父。そう思ってみると、祖父の作曲した曲には、三刀屋に咲く緑の桜の『御衣黄ぎょいこう』、由緒ある峯寺の『火祭り』など、ふるさとの自慢となるもの、三刀屋の誇りとなるものをテーマに取り上げています。祖父に曲に込めた思いや願いを聞いて

みました。

「聞く人が、三刀屋のいいところや永井隆博士の偉大さを知って、ふるさとを愛する人になってほしいよ。」と話してくれました。

今まで私は、リズムや音を合わせる楽しさを中心に一生懸命練習してきました。でも、祖父の言葉を聞いて考えてみました。私だけが楽しむ太鼓ではなく、聞いてみる人にも楽しさが伝わるように打ちたいと思いました。そして、博士の平和への祈り、三刀屋のよさ、祖父のふるさとへの思いと太鼓への情熱を込めて、聞いている人にもそれが届くように打つことが大切だと思うようになりました。

太鼓には、みんなで心を一つに音を合わせて、汗を流してその曲を表現するよさがあります。太鼓の音は低くて、力強く心に響きます。お母さんのおなかの中で聞く音だとも聞きました。

七月二十五日は三刀屋の夏祭りです。祖父のつくった曲でステージに立ちます。次の日には、ドイツの方にご披露します。三刀屋太鼓の響きは、平和を祈り、三刀屋を愛する響きです。これからは、祖父の思いを胸に、ふ

るさとを誇りに思う気持ちを私の握るばちに込め、重厚な太鼓の響きに乘せて、みんなに伝え、届けていきます。



最優秀賞

私の核廃絶

曾祖父といっしょに

広島県

盈進中学校 三年

前まえ原はら未み来き

私の母方の曾祖父は、七十一年前の広島で被爆した。当時二十八歳。一九九二年、七十五才で亡くなった。私は、曾祖父の写真をながめながら、祖父母や祖父の兄弟から曾祖父について聞き取った。

曾祖父は、鉄道関係の仕事をしていたが、人手不足を補うために福山から広島に出て働いていた。そしてあの日：曾祖父は、熱線は免れたものの、爆風で倒壊した建物の木片が飛んできて、お尻に刺さった。

「広島で大変なことが起きた。」

知らせを受けた曾祖父の父は、福山から広島へ探しに行き、探しまわって見つけ、福山へ連れ帰った。

傷は深く、治療薬も十分になく、傷口には蛆がわいた。妻は必死に看病し、その甲斐あって、傷は残ったが回復した。曾祖父は一男二女を育て上げ、七人の孫にも恵まれた。

私は今年四月まで、曾祖父が被爆者だということ、私が「被爆四世」だという事実を知らなかった。曾祖父は、放射線被害を身に受けた者とその家族に対する差別を恐れて、あの日の広島と自分が被爆者であることを、家族にも身近な者にも語らなかつたという。祖母も祖父と結婚してから、曾祖父が被爆者だと知った。他の被爆者もそうであつたように、曾祖父もまた、結婚や就職において、「いつ差別されるかわからない」という恐怖の中で生きたのだと思う。その他、曾祖父については、被爆者健康手帳の取得に苦労したことなど、断片的なことしか言い伝えられていない。

今年是被爆七十一年。「被爆者の平均年齢は八十才を超え、今を生きる若者たちが被爆体験を直接聞ける最後の世代」と耳にすることが多くなつたが、曾祖父の聞き取りをして、この意味を、自分に重ねて実感するようになった。そんなとき私は、『この子を残して』を読んだ。

永井隆先生の苦悩と人間愛に心打たれた。

※(註)「わが子のおいを久しぶりに味わった。：私はぐっとこの子を抱きしめたくなった。親犬と子犬とが遊ぶように、どこでも構わず、かみついたり、なめたり、たたき合ったり、ゆさぶったり、思い切り体と体とぶつけ合って、時のたつのを忘れてみたい。：一分でも一秒でも死期を遅らしていただいて、この子のさみしがる時期を縮めてやらねばならぬ。」

胸が詰まった。そして私は、曾祖父が見たあの日の広島を聞いてみたいと思った。原爆がつくった傷口をさすって、曾祖父の苦悩や悲しみや喜びや願いを聞いてみたくなった。しかし、その思いは実現しない。でも、私はこの頃、私の活動には、身近に曾祖父がついてくれていると思うようになった。

「ひいおじいちゃんは被爆者だったんよ。」

そう教えてくれたのは祖母だ。祖母も母も、私が中学生になってから自主的にはじめた核兵器廃絶の署名活動をずっと応援してくれていた。真夏の活動、それが連日になって、泊まり込みになっても必ず笑顔で送り出し、帰れば必ず、

「おつかれさま」

とねぎらってくれた。祖母や母の応援は、曾祖父の応援だったと今は思える。そして、私が署名活動を続けているからこそ曾祖父のことを知り、曾祖父が私を、すべての被爆者の願いであろう核兵器廃絶の活動に導いてくれたと、思うようになった。

私が行っている署名は、核兵器禁止条約締結を求めるための活動だ。「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」という被爆者の復讐と敵対を超えた素朴で崇高な平和への願い。それを原点に、私は今年も真夏の街頭に立つ。今年から私は曾祖父といっしょに。

「私は被爆者よ。兵器を作ったんよ。あの日、閃光が走った瞬間に『ドーン』と大きな音がして、爆風でガラスの破片が刺さったんよ。私は何とか助かったけど、友達が亡くなってしもうたんよ。明日は八月六日だから、いまから慰霊碑に参りに来たんよ」

街頭に立つからこそ聞くことができる被爆者の体験談。ある被爆者の声が、曾祖父の声にも聞こえる。私が伝える。平和の願いは。

※(註)『この子を残して』秋津書舎・二十頁

◆ 中 学 生 の 部 ◆

優 秀 賞

高祖母と曾祖母から
受け継いだ戦争への想い

島根県雲南市立

掛合中学校 一年

加藤大良

僕は、戦争を体験した高祖母と曾祖母と生活しています。高祖父と曾祖父はもういません。曾祖父は病気で数年前に亡くなり、高祖父は太平洋戦争に出兵し死んでしまったからです。

「お父さんが戦死しました。」

七十一年前、怒られると覚悟して、訪れた校長室。当時、まだ小学生だった曾祖母は、そこで聞かされた話を、なかなか現実のこととして受け止められなかったそうです。半信半疑で家に帰ると、そこにはすでに、村の人によって葬儀の用意がされていました。

この時戦死した高祖父は、まだ三十六歳。大酒飲みで、

しばしば高祖母にも怒られる半面、子煩悩でとても優しい人だったそうです。そんな高祖父の死は、残された高祖母や曾祖母の胸に悔しさや、むなしさを刻んだにちがいありません。

高祖母や曾祖母の戦争体験を聞いて育った僕に、今年とても印象に残る出来事がありました。それは、アメリカのオバマ大統領が、広島を訪問し、十七分間のスピーチを披露したことです。

スピーチの中で、僕にはとくに印象に残る場面がありました。

※1「私たちは、愛する人たちに思いをはせます。朝一番の子どもたちの笑顔。食卓での配偶者との優しいふれあい。親の心地よい抱擁。そうしたことを思い、そうしたかけがえのない瞬間が七十一年前の広島にもあったのだと考えることができます。亡くなった方々は、私たちと全く変わらない人たちでした。」

この部分を聞いたとき、僕はおのずと話に出てくる人々と高祖父とをつなげていました。きっと高祖父も、この話に出てくる「私たち」と、同じだったのだと思います。我が子と過ごす時間を大切にしていたのでしょうか。

高祖母のつくるおいしいご飯を毎日楽しみにしていたのでしよう。かけがえのない日々を刻んでいたのです。今の僕たちと同じように。

そんなごく普通の、僕たちと全く変わらない生活を送り続けていた高祖父にとって、育ち盛りの子どもを残し、二度と帰ることはできないという不安を抱きながら、戦争に行くことは、どれほど無念だったことでしょうか。

オバマ大統領が、スピーチの中で思いをはせた、原爆の犠牲者の方々だってそうです。僕は去年、修学旅行で広島原爆資料館に行きました。そこで見た、黒こげの弁当、ぼろぼろになった当時の服、目や皮膚がとけた身体。その持ち主それぞれが、原爆が落ちる直前まで、高祖父や僕たちと同じような生活を送っていたのだと思うと、改めて戦争の恐ろしさや怖さを感じました。

しかし戦争の犠牲は、亡くなった人だけでなく、戦争を生き延び、今を生きている人々にも及んでいるように思います。高祖父が戦死した後、残された家族は、家事や仕事に追われる日々を過ごしました。曾祖母も小学校を休んで、母である高祖母の手伝いに専念することになりました。弟や妹の子守に、食事の用意、さらには村の

活動にも参加していたそうです。そのため、曾祖母はほとんど勉強したり、遊んだりすることができない少女時代を送りました。曾祖母はこのことを「あまり気にしていない」と言うけれど、実際はどうなのでしょう。毎日学校に通い、勉強を続けていたら、仲間たちと仲良く日々を過ごすことができていたら。もしかしたら、曾祖母にも別の人生があったのかもしれませんが。

一回の戦争や一発の爆弾は、多くの人々の命を奪い、残された人に大きな傷跡を残し、「当たり前」の生活を変えてしまいます。だから、人々を巻き込む戦争は絶対にすべきではありません。世界が戦争を二度と繰り返さないために、僕は、戦争で命を落とした高祖父、悲劇を背負って生きて来た高祖母や曾祖母の思いを大切に、戦争体験を語り継いでいきたいと思っています。そして身近な平和の大切さを訴えていきたいです。

※1 オバマ大統領のスピーチ：毎日新聞（五月二十七日付）の訳を引用。

佳作

「さよなら」の意味は

島根県出雲市立

斐川東中学校 一年

国 くに 元 もと アイコ

「さよなら」

人はこの言葉に何を思うでしょうか。またどんな「さよなら」を心に思い浮かべるのでしょうか。私はもともとポルトガル語を話しますが、ポルトガル語でも日本語でも「さよなら」はよく使う言葉です。でもよく考えると「さよなら」はいろいろな意味を持っていることに気付きます。例えば学校の終礼の時に言うけど、その時に言うさよならは、「また明日会えるね。」と分かって言うさよならです。

そして、いつも私が心に思い浮かべる「さよなら」は、家族と別れるときに言った二つのさよならです。

私がまだ四歳、弟が二歳の時に、父と母は「日本に行く。」と言って私たちのもとを離れました。いつか戻ってくるかわかっていたけれど、それでも涙は止まりませんでした。父と母が日本に行くと、私と弟はブラジルの父方の祖母の家で過ごすことになりました。二人とも新しいところに慣れるのは難しかったけど、祖母と祖父は優しくてそれがうれしかったです。私は毎日、父と母が戻ってくるようにと祈っていました。弟は母のことは覚えていたけど、父のことはいつしか全く覚えていないようになりました。そしていつも夜になると言っていました。

「お父さんとお母さんは今日もどるかな。」

私はそれを聞くとどう答えたらいいか、いつも考えました。でも答えは見つかりませんでした。

一年半たつと、祖父が病気になって亡くなってしまいました。その時私は

「さよなら、おじいちゃん。」

と言いました。もう戻ってこないとわかっていても、戻ってきてほしくて涙が止まりませんでした。私はこの時五歳でしたが、この時のことはずっと忘れません。今

思うとこの時の「さよなら」は、もう会えない、という気持ちを含めたさよならだったと思います。

祖父の死後少したつと、母がブラジルに戻ってきました。父はいませんでした。

「お父さんはどこ？」

と聞くと、母はこう言いました。

「日本で仕事をしているよ。」

私は少し悲しかったけど、母に会えて本当にうれしかったです。でもみんなで祖母の家に着いたら、母がこう言いました。

「ブラジルにいるのはあと少しだから。」

私はそれを聞いてまた悲しくなりました。でも、母は、今度は母と私と弟も一緒に日本に行くというのです。

それから一年二ヵ月たって、日本に行く日になりました。祖母も一緒に、家族みんなで空港に行きました。

「さよなら」

と言いながら、みんな悲しくて泣いていました。でも、私はその時まだ、「さよなら」の持つ大きな意味が本当にはわかっていませんでした。

日本に来て、父にも会い、みんなうれしい思いでいっ

ぱいでした。そして私は日本の小学校一年生になりました。

日本に来て六年、今は私は日本にも大分慣れ、友達もできました。でも、ブラジルを離れるときの悲しさは心の中にずっと残っています。今ブラジルの事を思い出すと、どうしてあんなに空港で家族が泣いていたのかわかります。あの時の「さよなら」は「もうブラジルに戻ってこない。」「もう大事な人にも会えない。」と覚悟していた「さよなら」だったのです。私が今までで一番「さよなら」の持つ大きな意味を感じたのはあの時だった、と今ならわかります。

中学校一年生の私は、日本語もかなり分かるようになりました。そして「さよなら」もよく使っています。これから生きていく中で何回あの時のような「さよなら」を言うことになるのだろう、と考えることもあります。だからこそ、今この場所で家族と一緒にの今を大切に生きていこう、そして多くの人にこの思いをわかってほしい、そう思います。

佳作

未来へ語り継ぐために

沖縄県八重瀬町立

東風平中学校 三年

福^{ふく}原^{はら} すすな

「僕が生まれた この島の空を 僕はどれくらい知ってるんだろう」

歌手のBEGGINが「沖縄本土復帰三十周年」のイメージソングとして歌った「島んちゆぬ宝」は、沖縄だけでなく全国で親しまれています。はたして何人の人がこの曲に込められた本当の意味を知っているでしょうか。

今から約七十年前、沖縄では民間人を巻き込んだ唯一の地上戦が行われました。「緊急召集令状」が出され、満十七歳から四十五歳までの男性は防衛隊として、十七歳未満の少年少女は「鉄血勤皇隊」や「ひめゆり学徒隊」として戦場へと送られました。残された幼い子供や

女性、老人達はこの世の地獄となった沖縄を北へ南へ逃げ惑いました。夢や希望を壊され、家族や大切な人と切り離されて戦場へ向かった人達は、どんな気持ちだったでしょう。もし、私があの時代に生きていたら、戦争に喜んでは行かないと思います。沖縄戦では、私と同じ歳の少女達が、豪の中で数えきれない重傷兵を励まし、手足の切断などの手術の手伝いを強いられていました。私だったら、絶対に耐えられないと思います。

「島んちゆぬ宝は、悲惨な沖縄戦の記憶や本土復帰に至るまでの沖縄の人々の思いを表現しています。歌詞に出てくる「トゥバーラマやデンサー節」は古くから、多くの人に謡い継がれてきました。でも、沖縄戦中は郷土の言葉を話すだけでスパイ扱いされ、殺されるといいう悲しい事実もありました。まして唄を歌ったらどうなったか想像がつくでしょう。

歌は昔から人々の心を和ませ、豊かにする大切な文化です。「祝いの夜も 祭りの朝も どこからか聞こえてくるこの唄を」いつの頃からか、沖縄の人々は歌を口にすることも許されず、悲しい戦世の記憶とともに忘れ去っていきました。

終戦後は、二十七年間米軍統治下に置かれ、祖国日本とは切り離される日が続きました。

今は、日常会話に「方言」を使う雰囲気があり、郷土の言葉を大切にするようになりました。しかし、戦後の学校でも、方言札に代表されるように、方言を使うと罰を与えられ使わないように教育され、ますます沖縄の文化が失われていきました。

普段から使う言葉や歌が否定され、使えなくなるとしたら、周りから笑顔がなくなり、殺ばつとした空気が流れると思います。そんな毎日に私は耐えられません。当時の人達はこの悲しみや苦しみを伝えることも許されなかったと思うと、私は怒りを覚えます。BEGINは、先人たちの思いを歌い、今これから生きる私達に事実を訴えているように感じます。何気なく口にしていたこの曲にこれだけの熱い思いが込められていると知った時、心を打たれました。私はBEGINのように歌で伝えることは出来ないけれど、沖縄戦の事実をしっかりと受け止めて語り継ぐ事が出来ると思います。

今年、十八歳以上の人に選挙権が認められ、実際に統一地方選挙や参議院選挙が実施されました。若い世代の

声がより多く社会に反映される動きが高まっています。これから将来、憲法が見直され、社会がどんどん動いていくような気がします。その中で、私達は過去に目を向けて未来へ発信する役割を担っています。だからこそ、自分の意見を言えるように、相手の考えをしっかりと聞けるように広い視野が必要です。

「いつの日か この島を 離れてくその日まで 大切なものをもっと 深く知っていたい」

これから、私達にどんな未来がまっているかは誰にも分かりません。けれど、大切な事実を未来へ語り継ぐことが私達の使命であり、それが「島んちゅぬ宝」だと思います。

◆ 高 校 生 の 部 ◆

最 優 秀 賞

二つの思い、願いは一つ

広島県

盈進高等学校 二年

作 原 愛 理
さく はら あい り

二〇一六年五月二十七日。世界が広島を注目した日。

この歴史的な日を永井隆先生は天国からどう見たか。私は、『この子を残して』を読み、永井先生の人間愛に裏打ちされた生きざまを知った。そしてその視点から米国オバマ大統領の被爆地広島訪問の意味をとらえ直した。

私は中学二年から核兵器廃絶のための署名活動で街頭に立ち、被爆者や市民の平和への願いを胸に刻んできた。その活動の上に昨年、外務省から「ユース非核特使」としてニューヨーク国連本部に派遣され、核軍縮に携わる世界のリーダーたちに核兵器廃絶への決意を訴えた。その経験のもと、大統領の広島訪問が決まっつてすぐ、「何

もしなければ何もはじまらない」と思い、大統領に手紙を書いた。

五月二十七日前後、メディアでは、被爆者をはじめ、識者の多様な意見が報じられた。訪問そのものに対する素朴な感情から外交上の効果、スピーチ内容の見解等々、幅広く紹介されていたが、私にとっての最大の関心は大統領が「謝罪すべきかどうか」だった。この問題だけは、核兵器廃絶という共通の願いをもっている人々の間でも、意見が二分していた。

坪井直さん。広島県原爆被害者団体協議会（以下、広島被団協）理事長で、被爆者代表として、五月二十七日の「献花式典」に出席した。あの日、オバマ大統領が演説を終えて自ら歩み寄り、最初に話しかけた被爆者だ。

私は今年三月、坪井さんから彼の半生を五時間かけて伺った。「Never give up」。彼は、こう叫び、常に被爆者の先頭に立って核兵器廃絶を訴えてきた。だが自身の、被爆者故の結婚差別の体験話になると、ハンカチで目を拭いた。私は、あの日から七十一歳経った今でも、その姿にこそ、核兵器の非人道性が端的に表れていると思った。そして、坪井さんの手を固く握らせていただきたが

ら決心した。「被爆者の苦しみと願いは私が必ず受け継ぐ」私は、大統領への手紙にこう書いた。「被爆者に会ってほしい。なかでも坪井直さんに会ってほしい。」私がそうであったように、手を握り、目を見れば、直接あの日の広島・長崎の惨劇が伝わると思ったからだ。実は私も、「献花式典」に参加していて、私の願いが目の前3mで実現した奇跡に感涙していた。

広島・長崎で被爆した一一五人のうち七十八・三パーセントが謝罪を「求めない」と回答（『中国新聞』二〇一六年五月二十三日）。坪井さんは、「よく来てくれたと言いたい。『謝れ』はいらない。」（『毎日新聞』二〇一六年五月二十七日）と答えていた。謝罪よりも、あるいは、謝罪を求める気持ちをあえて押し殺して、悲願の核兵器廃絶のための訪問実現を選んだ重さも感じ取れる。

一方、謝罪を求める声もあった。広島被団協初代理事長の故・森瀧市郎さんの娘の森瀧春子さん（核兵器廃絶をめざすヒロシマの会共同代表）は、私にこう語った。「私たちの運動は被爆者の苦しみや無念を背にしている。多くの市民の命と人生を奪い、あまりに惨い被害を与え

た米国が、誤った歴史に自ら向き合うことが大切。『謝罪せよ』との要求は当然。要求しないのは亡くなった被爆者に失礼」

私はどちらも正しいと思う。と同時に、入市被爆した父を持つ佐田尾信作さんの大統領へのメッセージに、私は永井先生を重ねた。

「謝罪の気持ちがないなら遠慮願いたい、と私は考えた。しかし本紙に日々掲載される識者や市民、読者の意見を読むにつれ、考えが少し変わった。憎しみの言葉を投げ掛けないことが広島の尊厳だと、ある読者は投稿していた。心動かされた。」（『中国新聞』二〇一六年五月二十七日）

永井先生は天国から、大統領にこう伝えたかったに違いない。

「この子を残して逝かねばならなかった私たち被爆者の無念を知ってほしい。原爆投下は間違いだったことは認めてほしい。だが、私は憎しみの言葉は投げ掛けない。それは、広島と長崎の尊厳なのだ。だから誓ってほしい。そして実現してほしい。核なき世界を。」それは私の願いでもある。

◆ 高 校 生 の 部 ◆

佳 作

博士と祖父の志く許し愛く

秋田県立

横手高等学校 三年

後藤 ゆうひ

永井隆博士が少年時代を過ごした「生い立ちの家」。
もし案内板が無かったら、通り過ぎていたかもしれない。
ふと、祖父の家に帰って来たような気持ちになった。そ
んなはずは無いのに。

「木戸の開きが鈍いな。ドライバー持って来い。」――
えっ、いいじ？ まさか。――

「一緒に来てたら言ってたよね、きつと。」

母だった。確かに祖父なら頼まれなくても直していた
と思う。器用な人で、村の人たちから頼られていた。祖
父が運転する車に乗っていると、

「あのバックホー、最新型だな」

とか言つてよそ見するので怖かった。土砂崩れや豪雪に

備えて一台あれば便利だろうと、本気で欲しがっていた。
趣味と人助けと妄想が混ざってる、と祖母が笑っていた。
せっかく外出しても、祖父は建物の裏に回って電気配線
や浄化槽の蓋を観察するという怪しい行動に出る。

でも自慢でもあった。真夜中に電話がかかってきて、
ガス欠だと聞いてガソリンを届けたり、電球交換に行っ
たりしていたから。

「いいじは『今』が口癖だったね。困ってる人にとって
は一分一秒が一大事だって。でも今でこそ重大なトラブ
ルみたいな意味で使う『一大事』だけど、語源は仏様が
人間を救うためにこの世に現れる重大事ってことらしい
よ。」

と母が言った。父は雑誌で読んだという久松シノさん
の記事を教えてくれた。永井博士と一緒に、原爆の被害
に遭いながら治療に当たった方らしい。火が迫っている
し、博士も血だらけなので

「早く逃げましょう」と言つた久松さんに、博士は「一
大事とは今日唯今のことなりーっ」と答えたという。

「生い立ちの家」は、誰か奉仕作業でもしてくださつ
ているのか、雑草は生えていないしガラスも磨かれてい

た。管理人がおらず、無料で見学できるということとは、荒らされる危険もあるということだ。それなのに泰然と佇んでいた。雑木林や細く曲がりくねった坂道や点在する村人の家など、みんなで博士の家を守っているようだった。

未だに帰還困難区域になる福島県の祖父の家は、パトカーや除染作業員の集合場所になっていて、泥棒に荒らされずに済んでいるそうだ。人の住まなくなった村で、広い駐車場が役に立っている。

何だか皮肉だ。祖父が生きていた時、祖父の家は泥棒に入られ、心無い人たちから陰口を叩かれ、祖父は胃癌になった。亡くなった夜のことは忘れられない。本来なら霊安室に安置されるはずなのに、当直の看護師さんは「どこでもいいから葬儀屋に電話して、早く病室を空けてください。」

と冷たく言い放った。

祖父を間接的に死へ追いやった泥棒は、出所して原発事故の損害賠償を貰っているという噂を聞いた。

「盗んだ額になるまで弁済させればいいのに。」
と言ったら、

「じいじが生きていてじいじが請求するなら分かるけどママにその権利は無いよ」と返された。

祖父の死以来、いい人がいい最期を迎えるとは限らない不条理に疑問を持つようになった。見送りもなく祖父を乗せた台を押しながら、非常灯を頼りに真っ暗な病院を歩いた経験が、私の進む方向を決めた。

姉は理不尽な医療者への怒りを力に替え、大学で医療科学を学んでいる。緩和ケアや苦しくない抗癌治療の研究をするために。私は法学部を目指している。時間も予算も限られている以上優先順位は不可欠で、それを瞬時に判断する勇気と知恵が、医療者にも法律家にも同じように求められていると思う。

世界中の人たちに感動を与えた永井博士の偉業を讃える記念館や生い立ちの家。それに比べて祖父の家は、どんな人が住んでいたのかなんて話題にも上らない。でも、祖父のお陰で私は志を持つことができた。許し愛という道があるから歩きやすいよ。ありがとう。

◆ 高 校 生 の 部 ◆

佳 作

斑な世界へ

愛知県

滝高等学校

三年

伊藤
藤正
子

春は萌え

夏は緑に

紅の

斑に見ゆる

秋の山かも

私は、万葉集に編さんされている作者不詳のこの歌が好きだ。初めて読んだとき、不思議だなあといいながら、強く魅かれた。

しばらくして、不思議と感じたポイントが分かった。斑だ。作者は、斑に紅葉した山を美しいと感じているのだ。現在の社会において、斑を美しいと感じる人は多く

ないだろう。整然とした陳列、整然とした区画。人々は、整然としたもの、規格に合ったものを好む。

私の家の裏山は、秋になると、文字通り斑になる。赤や黄に色づく葉。一色ではない、様々な趣をもつ緑の木々。引越してきて初めての秋、私はこの山を見て思った。紅葉したときのこと、何も考えずに植えちゃったのかなあ、と。でも、この歌を知って、私の考えは変わった。「斑は、人に優しい。」

最近、新聞やテレビをにぎわせるニュースに心がちくんとする。悲しみや苦しみに顔をゆがませる人。逃げまどう人々。テロ、報復攻撃、難民。少し前までは、めつたに聞くことのなかった単語が毎日行き交って、私の心に突き刺さる。現在起きている悲しい出来事のほとんどは、斑を許せないことから起こっているのではないか。そして、過去にさかのぼっても、そうだ。軍国主義下の日本やナチス政権下のドイツも、斑を許さない社会だった。斑を許さない社会で、どれほど多くの人が殺され、戦争にかり出されただろう。どれほど多くの人が苦しみ、悲しんだだろう。

「正子も行きたいなあ。」

何度も口をついて出た。

七月十日、参院選。市役所から届いた入場券は、私を除く家族三人分。投票に行ける年子の姉がうらやましかった。

「お姉ちゃん、ずるーい。」

「ずるいって……。JKだから仕方ないじゃん。」

「JKでも、投票に行く人、いるもん。」

経済政策は、よく分からないけれど、戦争を放棄する憲法第九条を改正したくない。この思いをこめて投票したかった。

先の大戦だけをとっても、どれほど多くの命を犠牲にしたのか。国から命令を受けて出陣したのに、食糧の補給がなく南の島で餓死した人々。人を人とも思わない、あたかも戦闘機の一部として死なせてしまった特攻。戦後七十一年となる今でも後遺症に苦しむ広島、長崎の原爆。市民も巻き添えにした沖縄。数字で表すと、あまりに数が大きすぎ、無機的なため、感情を伴わなくなるけれど、一人一人に名前があり、顔があり、人生があったことを忘れてはならない。その人生を強制的に閉じさせ

てしまった罪を考えなくてはならない。

こんな私の話を聞き、

「JKの思いもこめて、行ってくるね。」

と、姉が言ってくれた。続いて母が言った。

「JKの心が持てるといいね。自律心と寛容。すごく難しいけれど、お母さんの人生のテーマだよ。」

JKは難しいけれど、せめて寛容な心をもつよう心がけたい。斑をよしとした作者は、多様なものを認める寛容な心をもっていた。万葉集は、歌の形も内容も多様だ。万葉人は、多様なものを認め、寛容だったと考えられる。世界に目を広げると、万葉はシルクロードの時代だ。シルクロードに関わる人々も、互いの文化を互いに認め、敬い、融合した、つまり、斑となった時代だ。この時代に倣えば、平和もみえてくると思う。平和な時代が訪れても、常に平和を意識して、守っていききたい。私の人生のテーマは、平和を守ることだ。

◆ 高 校 生 の 部 ◆

佳 作

先人たちの思い

沖縄県

KBC学園 未来高等学校 一年

伊敷江理
い しき え り

祖父がお酒を飲みながら何か語っています。

「おとう……戦争……。」方言があまり分からないので、この言葉しか聞き取れません。母が「今日も爺ちゃんは戦争で亡くなったお父さんのことを思い出しているんだよ。」祖父は母の幼い頃から、酔うと戦争で亡くなった父親への思いを語ってきたようです。少年の頃に別れた父親に「もう一度、もう一度だけ夢でいいからおとうに会いたい。」と言います。

沖縄戦が終結してからもう七十一年あまりが過ぎ去りました。六月二十三日、「慰霊の日」は太平洋戦争における沖縄戦の犠牲者の追悼、慰霊を目的として沖縄県が

定めた日です。私は慰霊の日には毎年、祖父母と共に平和記念公園に足を運びます。目的はそこにある「平和の礎」です。私の曾祖父は沖縄戦で亡くなりました。徴兵されて軍艦に乗っていたところ、魚雷攻撃を受けて沈没してしまったそうです。遺体は見つからず、今でも曾祖父の亡骸は海の底に眠っているでしょう。まだ小さい四人のわが子たちを残して、船の中で息絶えた曾祖父の無念はどれほどだったろうか。暫くしてから父が亡くなったことを知らされた十一歳の祖父の悲しみを思うと、胸が締め付けられるように辛くなります。

一家の大黒柱を失った曾祖母は女手一つで四人の子どもを育てていかなければなりません。戦後、物資が乏しい中で、自分一人生きていくだけでも容易ではない時代でした。満足に食事を与えられず、子供たちにひもじい思いをさせてきたそうです。戦争がなければこんな思いはさせなかったのに、と何度も思ったそうです。

曾祖父の名前が刻まれた礎の前でお供え物をした後、私たちはその場で黙祷します。平和の礎には沖縄戦による死者、二十四万人以上の名前が記されています。どこまでも果てしなく続くように連なる礎に、これだけ多く

の人が亡くなったのかと悲しくなりました。

私はこれまで、たくさんの方から戦争の体験談を聞いてきました。当時を語る彼らは七十一年以上も昔のこととは思えないほど、まるでつい最近起こった出来事のよう。細部まで鮮明に憶えています。それほど脳裏に焼き付いて離れない壮絶で、悲惨な記憶だったのだろうと思います。それにも関わらず、彼らは辛い記憶を掘り起こして私に伝えてくれました。

私たちを取り巻く今の沖縄は国内外からの観光客が多く訪れ、行きかう人は明るい笑顔に満ちあふれています。過去に民間人を巻き込んだ悲惨な地上戦があったことなど、微塵も感じられません。語り部たちは、若い人にも沖縄戦を知ってほしい、沖縄戦を風化させたくないという思いで話していたのだろう。

私は沖縄戦が繰り広げられた沖縄で育ち、身近に戦争を知る人がいたため、平和について考える機会が多くありました。しかし、最近私は私と年代代でも、第二次世界大戦に日本が参加していた事実すら知らない人がいるという話をテレビで耳にしました。やはり現代人の間で、戦争の記憶は着実に風化してきているのだと実感し悲し

くなりました。

先人たちの思いをここで途絶えさせてもいいのでしょうか。このまま沖縄戦をただの昔話にしてもいいのでしょうか。そんなはずありません。先人たちが私たちに平和の大切さを伝えてきたように、今度は私たちが次の世代に伝えていく義務があります。そのためになぜ戦争が起きてしまうのかを学び、受け止め、二度と同じ過ちを犯さないようにするにはどうすればいいかを考えるべきです。

文化や宗教の違いで意見が食い違い、時にはそれで争いが起こることもあるでしょう。それが国家レベルになり武力を持ち出すと戦争になってしまいます。それを防ぐには互い考えを尊重して、一人一人が思いやりの心を持ち、協力していけばいつか必ず真の平和が訪れると私は信じています。先人たちが何よりも望んだであろう平和な世界を目指して。

最優秀賞

遺影

島根県

錦^{にし}
織^{こり}
博^{ひろ}
子^こ

実家の仏間には、数葉の遺影が掲げられている。その中には私の両親もいる。母は長生きだったので米寿の時のお氣に入りの着物姿だ。隣の父は三十年以上前とは言えとても貧相だ。ネルの寝間着に綿入れの袖無し、首元からシャツが覗いている。

確か四十九日の法要の時だった。叔母が「なしてこげな写真かね？軍服を着て勲章つけたもつと立派なのがあるでしょうが」と言った。実は私も内心予想外の写真だったので、兄の答を待った。「いろいろ探してみたが、これが一番穏やかな顔だった。これは俺達に初めて子供が生まれたが、遠くてなかなか会わせられなかった。

やっと汽車に乗れ、加茂に家族で帰った。次の朝早く起こし、写真を撮れと言い出した。だから、切り取ったこの下には初孫がいる」と長々と説明があった。

戦後生れの私は、戦前の父を全く知らない。兄たちを通して知るのみだ。話によると、父は農家の次男で勉学が好きだったこともあり、教師から陸軍士官学校の受験を勧められ、その道に進んだとか。その後、実家の養子となり私達の父となった。そういえば、九九が覚えられない時、値札を切り、糸で綴じ、表に式、裏に答の手作りカードを作ってくれ「父さんは試験の時、こげして勉強しとったわ」と言ったかすかな記憶があるくらいだ。

長く戦地に赴き凍傷やマラリアに罹りつつも、終戦後無事帰ってきた。そして、母と細々と食品雑貨商を営む生活を始めたらしい。

あのことが起こったのは、年の離れた兄達は家を出て、私だけが残ри、そろそろ店番ができるようになった正月のことだった。

地区恒例の新年会からの帰り、若い衆が数人店に立ち寄られた。ほろ酔い気分で品物を選んでおられた。と、突然だった。一人の青年が銃を構える格好をして大声

で「ババーンババーン、おじさん、さぞ気持ちよかったです。自分は弾がこらん安全な高い所に立って兵隊には進めえって命令し、バタバタ倒れるのを見るってのは」

狭い店内の時間が止まった。私は恐る恐る父の方を向いた。駄菓子を計量していた父の手が、微かに震えていた。が、すぐに仕事を続けた。終わると、一人一人にミカンを握らせ言った。「さあ、今日は正月だけん、持つて帰って炬燵で食べなはい」と。若い衆は「だんだん」と言うのがやつとで足早に出て行かれた。今でも不思議だが、このことは母にも誰にも言わなかった。言えなかった。

昨年は、終戦から七十年の節目の年だった。

戦争を風化させまいと、多くの方がこれまで封印していたものを開き吐露され、それは言葉や活字となって伝わってきた。

投書欄に学徒動員のトラウマなのかトマト嫌いを語らぬ母に戦争の影を感じる人、お手玉や歌は教えたが、戦争の話は一度もしなかった祖母のこと等、当事者のみならずみんな苦しみを抱えておられ共感を覚えた。が、何

かしら違和感もあった。好むと好まざるに関わらず戦争に巻き込まれた人がいる一方で、そういう時代だったとはいえ自らその道を選んでしまった父は、葛藤し続けていたのではないだろうか。あの正月以来子供心に抱いた思いは、年と共に重くのしかかるようになっていた。

今年も変わらず正月が訪れ、あの情景が蘇っていた。

数ヶ月後の三月だった。ふとした映像が目に残った。それは山里の小学校が児童数の減少で閉校されるというニュース番組での児童の姿だった。「この学校はなくなりお別れしなければなりません、永井隆博士の思いは僕達がいっかりと、受け継いでいきます」と、穏やかにずっと先を見つめる眼差しに、「遺影の父の視線に似ている」と気付くのに時間はかからなかった。

その瞬間私の頭の中で何か崩れるのを感じた。これまでは罪に苛まれ苦しんでいた父。葛藤して苦しんでいた父。それは半ば哀れみのような勝手な妄想に過ぎなかったのでは、と思われてきた。父の視線もカメラ目線ではなく遙か先にある。もしかして父はすでに過去を自分なりに償いつつ、やっと訪れた平和を孫と有難く眺めていたのかもしれない。だからあの青年の言葉に傷つきながら

も一言の反論もせず許すことが出来たのではないか。

残念ながら今となつては問う術もないが、そんな思いを湧かせてくれた映像だった。

過去のしこりにいつまでもしがみついていたのは実は自分だったのだ。児童はしっかり過去に学び前を向き歩んでいるというのに。

まだ遅くはないだろう。私に残された月日は、犠牲を強いられた方々の為に、過去を無駄にせず前を向き生きる日々でありたい。

そして傘寿を前に故人となられたあの青年の冥福も心から祈りたい。きっと、そんな私を父は待っていてくれたような気がする。

それにしてもよくぞこの一枚を遺影にしてくれた兄に感謝、感謝だ。



◆ 一般の部 ◆

優 秀 賞

母から聞いた
満州引き揚げのいよ

広島県

末^{すえ}国^{くに}正^{まさ}志^し

私の祖父は、親族の反対意見のある中、ソ連との国境近くの寒村僻地を拓く満州の開拓団に加わり、敗戦後の混乱のうちに妻と幼い息子二人を死なせ、ただ一人残った娘である私の母とともに、命からがら引き揚げて来た前半生を持っている。しかし終生祖父は、帰国までの一切を孫である私には語らなかつた。

また、ほぼ毎日娘の嫁ぎ先である我が家に顔を出すにもかかわらず、親子らしい、ざつくばらんな会話を母としている場面さえ、一度も見せたことがなかつた。幼い頃の私は祖父の性格を無口と理解してただけで、どういう人生を歩んだかに思いを及ぼす思慮も当然ながらま

だ備わっていなかった。

祖父の人生について、そして母の人生にも影を落としている戦争について、初めて思いを及ぼすようになったきっかけは、小学校三年生のときの担任の先生の言葉だった。

「戦争で恐ろしい目に会った身内の人が、おうちにはいるはずです。その話をよく聞いておきましょう。大事なことが聞けるはずだから」昭和三十二年生まれの私の世代は、祖父や父親が軍隊経験を持つ者もいる最後の世代で、当時は戦地での経験を持つ人がまだ多くいた頃だ。さっそくその宿題を祖父に持ちかけてみた。けれど祖父は「そうか」と言っただけで続く言葉はなかつた。その黙殺とも言える反応に、幼い直感で（これは聞いてはいけないことなんだ）と悟った。母にもとまどいながら聞いてみた。母の方は、「教えておかんといけんことじゃね」と、満州での出来事のあらましを話してくれた。しかし、そのときの私が、母の話した内容の真実も真意も汲み取れるわけもなかつたし、ましてや祖父の無言について、その理由を推し量ることなどできようはずもなかつた。

成人してからの私は、戦争のない時代に生まれ合わせた運と、恵まれた環境で暮らしている幸を自覚するにつれ、だからこそ満州引き揚げの際の母の体験は聞いておくべきでそれは私の人生においていつか、次の世代に何かの場で伝えなければならないと思うようになり、時々あえて母に話を持ち出してみることをして来た。母はそのつど応じてくれたが、「ほんまにこの世の地獄じゃったよ。それはね、引き揚げて来た者じゃないとわからんと思う」と、いつもこの言葉で話を切り出すのが常である。その営みを現在も続けているが、近頃強く感じるようになったのは、母が老いるに従い、話の内容が、暗鬱で陰惨な色合いを濃くしているということである。

「銃殺されたんよ。開拓団の世話人は。八路軍（＝日中戦争時の中国共産党軍）によって、公開で」「夜を待って集団で闇の中を逃げるんじゃけど、赤子が泣いたら見つかるからと責められて、我が子を締め殺した親もおった」「女を見つけたらソ連兵が手当たり次第犯すんよ。女は皆髪も切って男の格好にしとるんじゃけど…連れて行かれたら、そのまま帰って来ん」「親は子を守る言うけど、子の食べ分まで取って食べる親も見たよ。ぎ

りぎりになったら、人間愛なんかはありゃあせん」そして、最後に言う。「でもね、日本人は奢っとつたんよ。それまでは中国人にひどい扱いをしとつたんじゃから。満州国建設、それ自体がとんでもないことじゃったんよ」

母からの聞き取りで、（もつと、見た限りを）と要求することを私は慎んでいる。伝えきれははずもないという深い諦観が母の心にはあり、それは、我が子に食べ物を与えることを優先して、親自身（＝私の祖母）は満足に食べるものがないばかりに、当時猖獗を極めた腸チブスで母を喪うことになってしまったやり場のない悲しみの深さに結びついていると感じるからだ。その悲しみ、その無念さは、息子といえども、同じ深さで飲み込めるものではあるまい。さらには、一度は、現地の中国人の家に出入されたものの、翌日逃げ戻った出来事を通して、親に捨てられたという意識が母の心に抜き去りがたく巣食ってしまったっているのも確かなことである。

「わしは、**（**は母の名）には、何も言えんじゃ」と、祖父は親戚の者にひそかに語ったという。母親も弟も死なせることになった娘への負い目が、父娘同

席していても、どこか硬い雰囲気を生み出している理由だっただろう。祖父には、語らないことが贖罪につながるの信念があったのだろうと、今は思うようになっていく。

母から聞いた引き揚げの辛酸は、その事実のみを子や孫の世代に伝えたい。どんな出来事であれ、苦しんだ人の心の痛み、悲しみは感受性と大きな視野があつて初めて正しく受け取られ、次への思考を導くはずだ。その涵養こそが、平和の基礎を強固にしてゆく営みだと思う。現実を省みず、欲に駆られて帝国主義の潮流に付和雷同した奢りが、ついには弱者層の人々を、国の如何を問わず、今にまで続く苦しみへと陥れたことを思わずにはおれない。



◆ 一 般 の 部 ◆

佳 作

先生 あしたもくるけえ

島根県

渡 わた
部 なべ
千 ち
秋 あき

私は、特別支援学級の担任として、障がいのある子ども達と一緒に学習している。特別支援に関わる担当になってからこれまでに様々な子ども達との出会いがあった。

担任を持ったばかりの頃は、自分自身も若く、教員としての経験が浅いこともあり、とにかく子ども達のできないことばかりが気になった。通常学級の子ども達と比べ、(まだこの漢字が書けない。)(まだこの計算もできない。)(と、できないことばかり見つけていたように思う。そして、何とかできるようにしてやらないといけないと考えていた。だから自ずと子ども達に対する口調が

きびしいものになり、表情も険しいものになっていたと思う。私がこんなになんばっているのに、なかなかできるようにならない子ども達に苛立ちを感じてしまうこともあった。

二校目に中学校へ赴任し、そこで特別支援学級を担任することになった。それまでの経験から、少しずつそれぞれの子ども達にあった学習方法や教材を工夫するようになった。しかし、中学校は三年間という短い時間しかないことや、その先の進路についても考えないといけない。その不安やあせりから、ここでもまた、何とかできることを増やさないといけないと、厳しい指導になっていたのではないかと思う。

そんな時、Y君との出会いがあった。体が大きく、おっとりとした笑顔のやさしい男の子だった。Y君は知的障がいがあり、中学校に入学した時にひらがなをすらすら読んだり書いたりすることがまだ難しかった。数は、十くらいまで数えることができるが、それより大きい数になると難しい状況であった。言葉で指示したことがなかなかうまく伝わらずそのために間違ってしまうことも多くあった。そうなる、どうしても間違いを指摘した

り注意をしたりする言葉かけが多くなった。そんなある日、授業中に指示したことは違うことをしているY君に、私は強い口調で注意をしてしまった。その後Y君は、ずっとしょぼりした顔で過ごしていた。しかし、終礼が終わって教室を出て行く時だった。いつものように教室のドアを出て行こうとしていたY君が、急に振り返り、「先生、明日も来るけえ。ありがとう。」

と、笑顔で私に手を振って、また何事もなかったかのようには帰っていった。そんな彼を見て、私は、ハッとしたり。ずっとできないことばかりに氣をとられ、Y君の優しさに全く気づいていなかった自分が、急にとっても恥ずかしくなった。させることばかり考えて、Y君のよさが見えていなかった。Y君のためと言いながら、自分のことばかり考え、都合をY君に押しつけていた。ずっと私がY君を支えていると思っていたが、本当は私もY君に支えられていたのだということに初めて気づかされた。それから、少しずつY君の良いところを見つめるようにした。そうすると、Y君だけでなく、これまでは見えなかった他の子ども達の良いところも見えるようになってきた。私が想像していた以上に、子ども達は多くのことができ、

たくさんのおもいを抱えていることにやっと気づいた。その後、産休に入ったため、Y君とはしばらく会えなかったが、赤ちゃんが生まれて少ししてから、Y君がお母さんと一緒に家までお祝いに来てくれた。恥ずかしそうにバラの花を抱え、小さい赤ちゃんの姿を見て、「かわいいな。」

と、言ったY君の笑顔を今でもよく覚えている。

『如己愛人』己の如く人を愛せよという永井博士の言葉である。二年前、母校である三万屋小学校に赴任し、再びその言葉に触れて、改めてY君に気づかされたことを思い出した。自分自身、子どもの頃に永井隆博士について聞いたことはあったのだが、よく知らないままだった。そして博士の言葉も知ってはいたが、これまであまりよく考えたことはなかった。(自分がしてあげている。)ということばかり考えていた私には、子ども達の姿が全く見えていなかった。『己の如く人を愛せよ』という博士の言葉は、教師である私にとって子ども達から学ぶということの大切さを改めて思い出させてくれた。

あわただしく過ぎていく毎日の中で、知らず知らずのうちに、自分の都合を子ども達や周りの人に押しつけて

しまっていることがよくある。また、自分はこんなになが
んばっているのに応えてくれないと愚痴をこぼしてしま
うこともある。それでも、少しずつ子ども達から学ぶ姿
勢をこれからも大切にしていきたい。そして博士の思い
を子ども達に伝えて行けるようになりたいと考えている。



◆ 特 別 賞 ◆

永井隆特別賞

「生と死は紙一重」

島根県

長^{なが}澤^{さわ}

諄^{まこと}

旧制大社中学四年生から長崎経済専門学校（註正確には長崎高等商業学校が昭和十九年改組した長崎工業経営専門学校）に入学したのが、昭和十九年四月、十七才の時、現出西窯創始者代表の多々納弘光君と二人だった。それ以来、多々納君とは寮生活、下宿も同じで、七十年以上の心から許せる無二の親友である。それから学業も半年位で、三菱長崎造船所に動員され、続いて三菱兵器大橋工場で、魚雷の製造作業をさせられた。

当時食糧難の折長崎名物の茂木枇杷を食べ過ぎ、赤痢の疑いで、救急車で長崎医大に入院させられた（昭和二十年六月二十日）幸い、擬似赤痢で、十日間で退院、

波根から両親も心配して来てくれた。多々納君も付き添いで出西に帰省した。波根で静養し全快して、多々納君と相談して、島根の出発を八月六日の列車に決定したが、突然多々納君は親類の家で食べ過ぎて、四、五日あとから行くとの電話があり仕方なく私一人で長崎に到着した。その頃は特急列車もなく、丸一日かかったの旅だった。一日寮で休養して、運命の八月九日の朝は、入院中にお世話になった保証人の長澤義夫先生（当時長崎商業の先生で父の知人長澤徹治郎さんの兄さん）宅に米三升をもって行く予定であったが、寮の配給米がたまたま翌日でもいつもならあげるけれど明日にして呉れとの事、大分ねばったけれどやむを得ず、本工場に出勤した。

もし配給米を貰っていたら、長澤義夫先生の家は浦上にあり、私はそこで奥さんと話をしながら原爆死をした事になる。本当に「生と死は紙一重」である。

長澤先生は本当に良き夫妻で可愛がって頂いた（ご夫妻とも原爆死された）ご冥福を祈るのみである。子供さん二人は、長崎もいずれは爆撃を受けるだろうからと数ヶ月前に奥さんの故郷の福知山に疎開させ、二人は原爆をまぬがれた。

本工場に出勤したら受持ちの旋盤は、私が休養中に空襲を予知して原爆中心地から一・八キロ離れた木原町のトンネル内に疎開していたのでそちらにまわることにした。

私はそこで原爆投下の時は便所作りのため、地上より二・三メートル下の穴の中で作業を工員の人達としていた。

十一時過ぎ、B-29が定期便のように悠然と飛んでいた。一瞬の閃光、猛烈な爆風、伏せたと同時だった。人間一寸先は闇というが、まさか直接被爆するとは夢にも思わなかった。幸い私は怪我もせず、大した事もなかったがトンネル工場内は停電、そこでマッチで火をつけローソクで明るくした。

そこで被爆した人たちが「助けて」とどんどん入ってくる。その中わめいた二人の子供が泣きやんだ時じつと顔をみつめ脈を見ると死んでいた。本工場は全滅のことで、班長の命で、四人一組となり班を十組作り担架をもつて爆心地に向かった。

途中に稲畠があり、よく見ると穂先が五センチ位やけただれ折れていたのには驚きを通りこして愕然とした。

そして爆心地の方は黒煙が猛然とあがり見えにくかった。

重軽傷者の人達はむしろがかぶせてあった。中に突然「兄ちゃん水を」と呼ぶ中学二年生位の少年がいた。見て、びっくりしたのは、彼の足の太ももには、爆風で飛んできた一メートルほどの木片が突き刺さり、肉はそげ、顔は真黒でかわいそうに息も絶え絶えだった。水筒の水をあげると「兄ちゃんありがとう」と何度も云っておいしそうに水をゆっくりゆっくり飲んでやがて十分程で息をひきとった。

末期の水と云うけれどもこの場合は良い事をしたと合掌しながら少年の頭をなで続けた。彼の最期は立派だったと今でも思っている。

九日から十四日まで毎日（六日間）救助作業を帰りは半壊した浦上天主堂の横の道を独りで寮へ帰り、翌日又爆心地で作業をした。

死骸ばかり、何万人も見たが、私自身も放心状態であつたのでその当時の様子が今もって良くわからない。

昭和二十年八月十四日帰省するため長崎発十時二十分の最終列車に乗った。乗客は超満員にふくれた夜行列車が次の浦上駅に到着した時、啞然とした。暑さのため、

列車の窓は全部開けられ暗黒の闇の中で数万の遺体が青白い燐が燃えている光景があった。

「あつ燐だ!!」と皆が叫び見ると西の方向に行列のごとく、あたかも「漆黒な海に月光が波に煌めき輝くが如く」皆が思わず合掌したが異臭とともに、まさにこの世の地獄であった。老若男女、たくさん逝去された人々が「ここに居るんだよ。早く迎えに来て」と一生懸命に瞬いておられるのだろうと推察しながら、涙が溢れ、止まらなかった。

八月十五日の夜波根に帰ったが、終戦は信じられなかった。その後一週間位下痢が続き微熱もあり、やせ細った身体で出雲の錦織病院（今の島根医大）で診察の結果、「あなたは原爆症です。白血病で病気に効く薬はありません、気の毒だけれども余命六ヶ月です。家で静養して下さい。」

まさに死の宣告であった。ところが一週間後、朝日新聞の広告欄に山口の小郡に断食道場が紹介され、万病に効くとあった。

一度は医師に見放された体だ、一度は死んだ命と思いバグ一つで診断の結果二週間。水のみの日が続いた四

日目に黒っぽい色の「宿便」が沢山出た。これは腸壁にこびりついた老廃物が排出したことで放射線でやられた細胞が消えよみがえったと思われる。

病氣快復のため二年間休学して復学した。

多々納君もその後同志五人と民芸の出西窯を創立し、二年間休学し同じ学年で下宿生活を送った。

永井隆博士が三刀屋町出身と知り私と松江の伊藤君、多々納君は三人で花束を買って見舞いに行った。

博士もびっくりされ、島根県出身の者が来るとは思ってもおられず、寝たきりであったが喜んで子供の頃の島根の生活や我々がどうして遠くの長崎の学校に入学したのかと質問されにこやかに、ほほえみながら最後に握手して一時間の訪問を終えた。

その後亡くなられたが良き思い出となった。今後二度とこの様な惨呆をおこなさない様心から祈るものである。

この作品につきましては、未来へ残していくべき貴重な手記として特別賞を設け、贈らせていただくこととなりました。

第二十六回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに受賞結果

【小学生低学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
和泉樹音	ぼくの「によこあい人」	島根県	雲南市立掛合小学校三年	最優秀賞
須山嵩真	家族がいるからぼくがいる／ぼくのおつとめ／	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	優秀賞
石田慶太	人のことをたいせつにできる人に	島根県	雲南市立西小学校二年	佳作
高原健人	バスケットつていいね	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	佳作
舟木結愛	みんなたいせつないのち	島根県	雲南市立西小学校二年	
山根湊太	平和な世界を広げていきたい	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	
宇都宮日向	いい心をもつために	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	
中村心菜	身近な人を大切に	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	
神田琴未	えがおいっぱい学校のしたい	島根県	雲南市立掛合小学校二年	

【小学生高学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
龍谷南	曾祖母から学んだ生き方	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	最優秀賞
永瀬天磨	相手を思いやる心	島根県	雲南市立佐世小学校六年	優秀賞
陶山晴香	命の恩人は私の身近に	島根県	雲南市立大東小学校六年	佳作
山根麗奈	当たり前じゃない大切な平和	島根県	雲南市立加茂小学校六年	佳作
景山桜	伝えよう!!太鼓の響きに乘せて	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	佳作
福間香歩	名前にこめられた願い	島根県	雲南市立海潮小学校五年	

白 神 響 記	今日もバトンをむねに	広島県	広島市立千田小学校六年	
深 田 裕 紀 乃	博士から学んだ平和	島根県	雲南市立加茂小学校六年	
寺 井 さくら	平和を	長崎県	壱岐市立石田小学校五年	
岩 田 明日香	「平和な世界にするために」	島根県	雲南市立掛合小学校六年	

【中学生の部】

氏 名	テ ー マ	都道府県名	学 校 名	賞 名
前 原 未 来	私の核廃絶～曾祖父といっしょに～	広島県	盈進中学校三年	最優秀賞
加 藤 大 良	高祖母と曾祖母から受け継いだ戦争への想い	島根県	雲南市立掛合中学校一年	優秀賞
国 元 アイコ	「さよなら」の意味は	島根県	出雲市立斐川東中学校一年	佳作
福 原 すずな	未来へ語り継ぐために	沖縄県	八重瀬町立東風平中学校三年	佳作
安 道 遥	「感じて伝える」ということ	広島県	ノートルダム清心中学校三年	
澤 本 莉 奈	愛の心と知識を持って	広島県	ノートルダム清心中学校三年	
濱 田 真 緒	広島から平和を考えて	広島県	ノートルダム清心中学校三年	
河 野 ほのか	「伝える」	広島県	ノートルダム清心中学校三年	
山 本 一 花	世界平和をつくる三粒の種	島根県	雲南市立大東中学校一年	
前 田 瑞 希	幸せになる	沖縄県	八重瀬町立東風平中学校二年	

【高校生の部】

氏 名	テ ー マ	都道府県名	学 校 名	賞 名
作 原 愛 理	二つの思い、願いは一つ	広島県	盈進高等学校二年	最優秀賞
後 藤 ゆうひ	博士と祖父の志～許し愛～	秋田県	横手高等学校三年	佳作

伊藤 正子	斑な世界へ	愛知県	滝高等学校二年	佳作
伊敷 江理	先人たちの思い	沖縄県	KBC学園 未来高等学校一年	佳作
武田 神楽	水晶の欠片を	島根県	石見智翠館高等学校二年	
須藤 恵	永遠のゼロと世界平和	神奈川県	聖ヨゼフ学園高等学校二年	
加藤 愛望	平和を私達から	神奈川県	聖心女子学院高等科三年	

【一般の部】

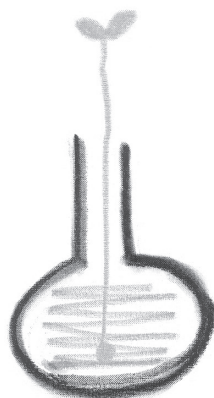
氏 名	テ ー マ	都道府県名	賞 名
錦 織 博子	遺影	島根県	最優秀賞
末 国 正志	母から聞いた満州引き揚げのこと	広島県	優秀賞
渡 部 千秋	先生 あしたもくるけえ	島根県	佳作
河 原 一慶	中学生職場体験と愛・平和	東京都	
山 尾 一郎	日本とトルコに学ぶ	島根県	
簀 内 豊美	愛と平和について	大阪府	
平 高 志	「愛」と「平和」と	島根県	
栗 田 寿樹	中国の思い出	栃木県	
太 田 裕子	心の豊かさ	島根県	

【特別賞】

氏 名	テ ー マ	都道府県名	賞 名
長 澤 諄	「生と死は紙一重」	島根県	永井隆特別賞



NO



YES

KU
2007. 8. 26